

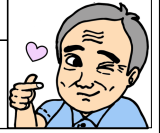
国語

date: 年 月 日

学習内容：意図すること  
注文の多い料理店 宮沢賢治

学籍番号

氏名



注文の多い料理店

宮沢賢治



二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついて、白熊のような犬を二疋つれて、だいたい山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを云いながら、あるいておりました。「ゼンたい、こちらの山は怪しからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ。」

「鹿の黄いろな横腹なんぞに、二三発お見舞もうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。くるくるまわって、それからどたと倒れるだろうねえ。」

それはだいたい山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまづいて、どこかへ行ってしまったくらい山奥でした。

それに、あんまり山が物凄いで、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起して、しばらく吠えて、それから泡を吐いて死んでしまいました。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ。」と一人の紳士が、その犬の眼ぶたを、ちよつとかえして、みて言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もうひとりが、くやしそうに、あたまをまげて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔を悪くして、じつともひとりの紳士の、顔つきを見ながら云いました。

「ぼくはもう戻ろうとおもつ。」

「さあ、ぼくもちよつと寒くはなつたし腹は空いてきたし戻ろうとおもつ。」

「そいじゃ、これで切りあげよう。なあと戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾田も買って帰ればいい。」

「兎もてていたねえ。そうすれば結局おんなじことだ。では帰るじやないか。」

ところがどうも困ったことは、どつちへ行けば戻れるのか、いっこう見当がつかなくなっていました。

風がどつと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はどつとどつと鳴りました。

「どうも腹が空いた。さつきから横腹が痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あるきたくないよ。ああ困つたなあ、何かたべたいなあ。」

「喰べたいもんだなあ。」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを云いました。

その時、どつとしろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。

そして玄関には、

RUE T AURANT  
西洋料理店  
WILD CAT HOUSE  
山猫軒

「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。」

「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

そして二人はその扉をあげようとして、上に黄いろな字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこは承知ください。」

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」

「それあそつだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りにはすくないだろう。」

二人は云いながら、その扉をあげました。するとその裏側に、「注文はすいぶん多いでしょうがどうか一タラこらえて下さい。」これはゼンたいどういふんだ。「ひとりの紳士は顔をしかめ

ました。

「うん、これはきつと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいと斯ういふことだ。」

「そつだろつ。早くどこか室の中にはいりたいもんだな。」

「そしてテーブルに座りたいもんだな。」

ところがどうもつるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわきに鏡がかかつて、その下には長い柄のついたブラシが置いてあったのです。

扉には赤い字で、

「お客さまが、こつて髪をきちんとして、それからきよの泥を落してください。」と書いてありました。

「これはどうも尤もだ。僕もさつき玄関で、山のなかだとおもつて見くびつたんだよ。」

「作法の厳しい家だ。きつとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいに髪をけすつて、靴の泥を落しました。そしたら、どつです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼつとくすんで無くなつて、風がどつと室の中に入つてきました。

二人はびつくりして、互によりそつて、扉をがたんと開けて、次の室へはいつて行きました。早く何か暖いものでもたべて、元氣をつけて置かないと、もう途方もないことになつてしまつと、二人とも思つたのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲と弾丸をこへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持つてもものを食うという法はない。」

「いや、よほど偉いひとが始終来ているんだ。」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

また黒い扉がありました。

「どつか帽子と外套と靴をおとり下さい。」

「どつだ、とるか。」

「仕方ない、とろつ。たしかに、ぼつとえらいひとなんだ。奥に来ていいるのは。」

二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、靴をぬいで、べたあるいて扉の中にはいりました。

扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、こつと尖つたものはみんなこつに置いてください。」

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちやんと口を開けて置いてありました。鍵まで添えてあつたのです。

「はあ、何かの料理に電氣をつかうと見えるね。金氣のものはあぶない。こつに尖つたものはあぶないと斯う云うんだろつ。」

「そつだろつ。して見ると勘定は帰りに、こつて払うのだから。」

「どうもそつらしい。」

「そつだ。きつと。」

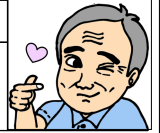
国語

date : 年 月 日

学習内容：意図すること  
注文の多い料理店 宮沢賢治

学籍番号

氏名



二人はめがねをはずしたり、カフスボタンをとったり、みんな金庫の中に入れて、ぱちんぱちんと錠をかけた。

「よし行きませうとまた扉をあけて、その前に硝子の壺が一つありました。扉には斯う書いてありました。」

「壺のなかのクリームを顔や手足にすりすり塗ってください。」

「みるどたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。」

「クリームをぬれというのはどういうんだ。」

「これはね、外がひじょうに寒いだろう。室のなかがあんまり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひびがきっている。こんなことで、案外ぼくらは、貴族とちがづきになるかも知れないよ。」

二人は壺のクリームを、顔に塗って手に塗ってそれから靴下をぬいで足に塗りました。それでもまだ残っていましたからそれは二人ともめいめいこすり顔塗るふりをしながら喰べました。

それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、

「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか、」と書いてあって、ちいさなクリームの壺がここにも置いてありました。

「そうそう、ぼくは耳には塗らなかつた。あぶなく耳にひびを切らすとこだった。この主人はじつに用意周到だね。」

「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か喰べたいんだが、どうも斯うとこでも廊下じゃ仕方ないね。」

するとすぐその前に次の戸がありました。

「料理はもうすぐできます。」

十五分とお待たせはいたしません。

すぐたべられます。

早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてくたさい。」

そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。

二人はその香水を、頭、はちやばちや振りかけました。

ところがその香水は、どうも酢のような匂がするのです。

「この香水はへんに酢くさい。どうしたんだろう。」

「まちがえたんだ。下女が風邪でも引いてまちがえて入れたんだ。」

二人は扉をあけて中にはいりました。

扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。

「いろいろ注文が多くてうるさかつたでしょう。お気の毒でした。」

もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさんよくもみ込んでください。」

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、こんどというこんどは二人ともきょうとしてお互にクリームをたくさん塗った顔を見合わせました。

「どうもおかしいぜ。」

「ぼくもおかしいとおもっ。」

「沢山の注文というのは、向つがこっちへ注文してるとんだよ。」

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは西洋料理に、来た人たべさせるのとはなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家とこのいうことなんだ。これはそのつづつ、つづつ、食べてやる家とこのいうことなんだ。これは、ふるえだしてもうものが言えませんでした。」

「その、ぼくは、ぼくらが、……うわあ、」がたがたがたがたがたして、もうものが言えませんでした。

「通け……」がたがたしながら一人の紳士はうしろの戸を押そうとしましたが、どうです、戸はもう一分も動きませんでした。

奥の方にはまだ一枚扉があつて、大きなきぎ穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあつて、

「いや、わさわさわ、苦勞です。」

大へん結構にできました。

「さあさあおなかにおはいりください。」

と書いてありました。おまけにかき穴からはきよきよ二つの青い眼玉がこちをのぞいています。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

ふたりは泣き出しました。

すると戸の中では、こそこそこんなことを云っています。

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみまじないようだよ。」

「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あそこへいろいろ注文が多くてうるさかつたでしょう、お気の毒でしたなんて、間抜けたことを書いたもんだ。」

「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、骨も分けて呉れやしないんだ。」

「それはそうだ。けれどももしここへあいつらがはいって来なかつたら、呼ばはぼくらの責任だぜ。」

「呼ばうか、呼ばう。おい、お客さん方、早くいらつしやい。いらつしやい。いらつしやい。お血も洗ってあります。菜葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたかたど、菜葉をうまくとりあわせて、まっ白なお血にのせるわけです。はやくいらつしやい。」

「へい、いらつしやい、いらつしやい。それともサラダはお嫌いですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげましょうか。とにかくはやくいらつしやい。」

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙屑のようになり、お互にその顔を見合わせ、ふるふるふるふるえ声もなく泣きました。

中では、いらつらつとわらつてまた叫んでいます。

「いらつしやい、いらつしやい。そんなに泣いては折角のクリームが流れるじゃありませんか。へい、ただいま。じきもつてまいります。さあ、早くいらつしやい。」

「早くいらつしやい。親方がもうナイフをにかけて、ナイフをもって、舌なめすりして、お客さま方を待っています。」

二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのとき、うしろからいきなり、

「わん、わん、ぐわあ。」という声が出て、あの白熊のような犬が二足、扉をつきやぶつて室の中に飛び込んできました。鍵穴の眼玉はたちまちなくなり、犬どもはうとうとなくなってしばらく室の中をぐるぐる廻っていました。また一声

「わん。」と高く吠えて、いきなり次の扉に飛びつきました。戸はがたりとひらき、犬どもは吸い込まれるように飛んで行きました。

その扉の向うのまっくらやみのなかで、

「にやあお、くわあ、ごころごころ。」という声が出て、それからがさがさ鳴りました。

室はけむりのように消え、二人は寒さにふるふるふるふる、草の中に立っていました。

見ると、上着や靴や財布やネクタイピンは、あつちの枝にぶらさがったり、こちの根もとにちらばつたりしています。風がどうと吹いてきて、草はさわさわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

犬がふうとうなつて戻ってきました。

そしてうしろからは、

「旦那あ旦那あ。」と叫ぶものがあります。

二人は俄かに元気がついて

「おい、おい、こたえ、早く来い。」と叫びました。

蓑帽子をかぶつた専門の猟師が、草をさわさわわわわわ分けてやってきました。

そこで二人はやつと安心しました。

そして猟師のもってきた団子をたべ、途中で十円だけ山鳥を買って東京に帰りました。

しかし、さうき二ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰つても、お湯にはいってても、もうもとのとおりにはなりません。

◎考えてみよう。

筆者は何を表現しようとしたのか？  
童話の体裁ではありませんが、最後の終わり方から考察してみよう。(二人の顔がもとのとおりにならなかつたのはなぜ)